

3 男子をめぐる問題

1 「女子問題」への関心

教育社会学において「男子問題」に関心が向けられるようになったのは、ごく最近のことである。少なくとも1990年代半ばまでは、「ジェンダー問題」といえばほぼ「女子問題」とであると見なされてきた。⁹¹ その最も大きな理由は、男子よりも女子の方が教育上不利を極めているという見方が支配的だったことである。日本における進学率の男女差は、高校段階では1970年代に、大学・短期大学を合わせた高等教育段階では1980年代に解消したが、男子では高等教育進学率のほとんどが大学に進学するのに対して女子では半数以上が短期大学に進学するという傾向が1990年代まで続いていた。また、学校の内部過程に焦点を当てた研究によって、フォーワールなカリキュラムにおいて伝達される知識の男女差が解消された1990年代以降も、女子の達成意欲を低下させたり女子の地位を引き下げたりする「隠れたカリキュラム」の作用が持続していることが指摘されてきた。⁹²

▷2 [V-2]参照。

2 「男子問題」の発見

しかし、1990年代後半になると、まずは成人男性が直面する「男性問題」に社会的な関心が向けられるようになった。これらは、大きく分けてふたつの側面から捉えられた。ひとつは、「女性問題」を引き起こしている側面である。例えば、トマス・ハイレンスやセシリア・ハラスメントのほとんどは、男性から女性への加害ケースである。従来「女性問題」として語られてきたこれらの問題は、男性が引き起こしているという意味では男性の問題でもある。もうひとつは、男性自身が「男らしさ」の社会的期待に苦しんでいる側面である。例えば、ハッフル・経済崩壊後の1990年代になると、男性の賃金の伸び悩みや失業・就職難が深刻化し、男性に一家の稼ぎ手役割を求める性別役割分業規範は、少なからぬ男性にとつて圧力と感ぜられるようになった。⁹³

こうして成人の男性問題が顕在化するなかで、教育における男子問題にも関心が向けられるようになった。例えば、従来から、教室で見られる「自己主張する男子と控えめな女子」という非対称な男女関係の形成には、教師による半ば無意識的な差別的処遇が関わっていることが指摘されてきた。しかし、教室内での男子と女子の相互作用に着目した研究は、そうした男女の非対称な関

▷3 そうしたなか、1998年以降男性の年間自殺者数は全自殺者数の7割を超え、男性自殺者の約半数が「勤労問題」や「経済・生活問題」といった仕事や収入に由来している。多賀太、2006『男らしさの社会学』世界思想社、pp.47参照。

3 「男子の不利」言説をどう見るか

欧米では、1990年代半ば以降、男子の学業不振や学校不適應などを根拠として、「男子も問題を抱えている」という主張が声高に叫ばれるようになってきた。ただし、「男子のほうに不利である」という主張が声高に叫ばれるようになってきた。たしかに、国際学習到達度調査(PISA)⁹⁴の結果を見ると、ほとんどの参加国で、「読解力」に関する男子の平均得点は女子のそれを有意に下回っている。また、女子のほうが、大学進学率の中等教育学校へ進学する割合が高いことや、学習活動への積極的な参加といった学校への適応度が高い傾向が欧米各国で報告されている。

こうしたなか、オーストラリアでは、従来の学校教育は男子の教育ニーズを十分に満たしていないとする連立議会の報告書を受け、2003年から莫大な国家予算をつぎ込んで、男子への効果的なリテラシー教育や同性的指導者から援助を受ける機会の提供などを含む、男子の補償教育プログラムが開始されている。しかし、この「男子の不利」という見方に対しては、批判的な研究者も多い。

「男子の不利」という見方は、労働市場における女性の圧倒的に不利な状況や、男子からの暴力やセクシュアル・ハラスメントによって苦しんでいる女子の問題を見えなくさせてしまう。また、男子であれ女子であれ、教育達成を首尾良く成し遂げている者もいる。不利な生活環境のもとで学校生活への適応が困難になっている者もいる。そうしたなかで、男子と女子をそれぞれ十把一箱げにして、「不利なのは男子か女子か」「援助すべきは男子か女子か」といった二分法で問題を捉えること自体に限界がある。

日本では、現在のところ、人々の関心はむしろ若い男性の就職難に向けられており、欧米ほど学業不振の「男子の不利」を主張する動きは見られない。しかし、女子に対する男子の学業不振をうかがわせる高校生のデータもあり、今後日本でも欧米と同じような主張が唱えられる可能性もある。われわれには、性別によって教育達成や職業達成のチャンスが大きく異なるという構造的側面を見据えながらも、同時に、同性内の多様性や不平等にも目を向け、どのような層の子どもたちがどのような援助を必要としているのかを冷静に見極めていくことが求められている。

▷4 例えば、木村源子、1997『教室におけるジェンダーの形成』『教育社会学研究』61: pp.39-54。

▷5 土田陽子、2008『男子の子の多様性を考える』木村源子・古久保さくら編『ジェンダーで考える教育の現在』解放出版社、pp.62-77。

▷6 PISA OECD加盟国が参加して2000年から3年おきに実施されている15歳児を対象とした学習到達度調査。

▷7 黒島洋雄、2003『高校生のこころとジェンダー』解放出版社。

〔参考文献〕
Martino, W., Kehler, M. D. and Weaver-Hightower, M. B., eds. 2009. *The Problem with Boys' Education: Beyond the Backlash*. Routledge.

1980年代、女性デ・オ「あみん」の歌う『待つわ』という曲が多く恋する女性の心をつかみ大ヒットした。サビの歌詞は以下のようになっている。

私 待つわ いつまでも待つわ
たとえあなたが ぶり向いてくれなくても
待つわ (待つわ) いつまでも待つわ
他の誰かに あなたがふられる日まで

この歌の主人公は好きな相手のことだけを想い、ひたすら「待つ」姿勢でいる。大変いびらしく、片想いをしてしている女性なら誰しも共感できるであろう。が、昨今では極めて珍しい「純愛」を描いたもので、「元祖ストーカーの歌」と呼ばれる意味も理解できる。

何故 知りあつた日から半年過ぎても
あなだって手も離らない
I will follow you あなたに ついてゆきたい

こちらも1980年代にヒットした「松田聖子」が歌う『赤いスイートピー』の歌詞の一部だ。好きな彼が手を握ってくれるのを「待つ」。ひたすら、半年間も待っているのだ。『待つわ』で印象的なのもこのような女性の待つ姿勢である。極めつけは、授業でも取り扱った「かぐや姫」の歌う『神田川』である。

二人で行った 横丁の風呂屋 一緒に出ようねって 着たのに
いつも私が 待たされた 流し腰が迄まで 冷えて

こちらは1970年代のヒット曲だが、待つ姿勢もここまでいくと徹底的という表現を超えて自虐的な行爲に見えてくる。「彼を待たすまい」という気持ちからか、自分の髪を乾かすことよりも、彼女は「待つ」ことを優先させた。そもそも、この「風呂屋」に行くとこのことを大事にする現代女性には別世界のことに思えるのではないだろうか。少なくとも、私は「石鹸がカタカタ鳴る」まで女を待たせるような長風呂の男、その上、その女の「身体を抱いて 冷たいね」と、他人事のように言い放つ男は嫌だ。たとえ大好きな相手としても許せる自信が無い。

70～80年代に流行ったこの3曲に共通して言える特徴は、男性が女性より上に位置し、憧れや理想といった存在、ということだ。女性から何かアクションを起こすことは「美」とされていなかっただろうか。「待つ」、「つくす」、「男の後をついていく」といったタイプの女性が普通で、望まれる男と女の形だったのかもしれない。

時は経ち、好きな男性に超する女性の姿勢も変わった。

受胎器握りしめて 彼にタイアルした 友達以上になれるかな？

本気で恋したいから 今も大事なひとだから
勇気を出して飛び込もう この距離が近づくように

こちらは昨年の末にリリースされた歌手 [aiko] のアルバムに入っている『彼の落書き』という曲の歌詞の一部である。片想いをしてしている男性への気持ちはまるで体中の落書きのように、なかなか消えない、という内容の曲で、大変共感できる。aikoの曲は常に女性の視線から見た恋愛がテーマになっており、そのリアルな表現が人気である。

結局、松田聖子とかぐや姫の曲以外全てが好きな人のことを想う女性の心情を歌ったものであるし、6曲ともそこに登場する女性は何の不満も無い「ラヴラヴカッパル」というわけではないようだ。状況は似ているが、前3曲と後3曲では共感できる度合いが違う。第一に、前3曲に登場する女性はうまくいかない恋に満足しているように思えるのだ。

満足、とまでは言えなくても、あまりうまくいかない状況を改善させるための努力をしていないように見える。おそらく、これらの曲をリアルタイムで聴いていた女性も「改善」が必要などは感じなかっただろう。こういった、今見ると「もどかしい」、「じれったい」と言いたくなるような、いわゆる「純愛」が最も普通で、美しいものだったのだから。しかし、産業化が進み、女性の高学歴化、晩婚化という変化が生じ始めた。男尊女卑が崩れきかせていた時代は終わり、女性でも頑張れば社会で活躍できる、という新しい時代を迎えた。この「努力は報われる」という考え方が恋愛シーンでも適応されるようになったのである。それを象徴するのが後3曲である。好きな男性に電話をかける努力、だまって見ているは駄目だから行動をする努力、「待つ」ことをやめる努力をしている。幸せも喜びも誰かがくれる、そんな受け身の姿勢から、誰もくれないなら自分でとりいかにたくては、という攻めの姿勢へと女性の生き方が変わっていったのだらう。もちろん、それは緊張するし、恥ずかしいし、本当に難しいことである。故に、歌になる。上手に伝えられる人、アーティストが片想いの女性心理を代弁し、背中を押してくれるのではないだろうか。かつての歌手が好きな人との憧れの気持ちを歌にしていたとしたら、今の歌手はもっと現実味を帯びた、人間くさい歌を歌っているように感じる。きれいなラヴソングから、その歌を聴く人と同じ視点になって、その人を勇気づけてあげようとする応援ラヴソングになった、という考え方ができる。

第二に、後3曲に登場する女性達からは「自分も努力するから、あなたもそれに応えて」という自己中心的な願望がこめられているように思う。『SHAPES OF LOVE』では1番の歌詞に「あなたが振り向かせるから 真剣に唇をきいて」というストレートな願い、『My Sweet Darling』では好きな「あなた」に対して「解って欲しいの」、「ここにきて」、「こっち向いて」、「いつものように指線を書きとさないで」といった少女がオモチャをおねだるような願い、『彼の落書き』でも「あたし」の気持ちに知らんぷりな「あなた」に「ねえこのかたまり 冷えた心を今すぐ燃えとくしてよ」と訴えている。まさに男女平等な恋愛が大原則として存在し、それを望むからこそその願望であろう。もちろん、これらを実際に口に出して言えるわけではない。それができていれば、結果はどうであれ、「片想いの」恋は終了してはすだから。口に出しては言えない気持ちだが、どの女性も日夜願っていることだからこそ、その歌に力強さに共感、支持してしまうのである。

第三に、前3曲がスローでしつとり歌われているのに対し、後3曲はどれもアップテンポで明るく歌われたものである。一方は「つくす恋」にひたるため、もう一方は「うまくいかない恋」を楽しむため、という目的の違いが各々の曲調を生んだのではなからうか。基本的に大人の、「神聖」なものであった恋愛が、多少の曲調に動じなくなった社会におい

これは1990年代に「Every Little Thing」が歌った『SHAPES OF LOVE』の歌詞の一部である。先にあげた3曲よりも女性性は恋に積極的になっているように見える。好きな人だからこそ、待つてはいられないのだ。

何にもしなきゃ何にもならない 自分の心にノイスターはいられない

こちらは「矢井田瞳」の歌う『My Sweet Darling』の歌詞の一部。2000年の作品だ。もちろん、これは恋愛をテーマにした曲であり、「恋愛に対し積極的に行動しよう」という女性への応援歌という意味合いもあるのだろう。ちなみに、この曲には以下のような歌詞もある。

神様はいない
だって折ったもん 願いが届きますようにって折ったもん...

好きな男性に恋焦がれ、神様に折ったり、見返りを求めてひたすら待ちたりすることを完全に否定している。自分以外は頼りにならないと見極め、強くなった女性が存在すると思ふ。

【華がない】のなかの私的生涯への関心ほどのような性質のものか。それは、雨が降り華がないという条件のもとで、恋びんのもていかになくしては、とほもって、この状況である。この状況の意図について、私もよくも調製してあったのは、若い同級生女子学生の発言であった。それらはいろ。熱烈な愛愛をしているならば、雨が降るとか、傘がなくても、恋びんの許にきまきりはない。それと対照され、作風のなかの主人公私的生涯について関心をもちたいとみえる。とゆきたい気持ちであり、雨が降っていないのに傘がないという状態である。社会生活と私的生涯はとによって語られるものである。それには、私的生涯は、恋びんとの存在あり、彼女に選り、新聞が伝えたものである。あるいは、愛の将来の問題であり、テレビで深刻な顔の入り、社会生活は各節の冒頭の二聯に示される。それは、都会における若者たちの自殺の増加であり、新聞が伝えたものである。あるいは、愛の将来の問題であり、テレビで深刻な顔の入り、社会生活は各節の冒頭の二聯に示される。それは、都会における若者たちの自殺の増加である。この作品の全体をみると、そこには、かなり見えやすいかたちでの、社会生活と私的生涯の対照の図式がみいられる。

誰かでは、愛が国の将来の問題を誰かが深刻な顔をしてしゃべっている。けれども問題は今日の雨傘がない。行かなくちゃ、君に選いに行かなくちゃ。君の家に、君に選いに行かなくちゃ。君の町に行かなくちゃ、君に選いに行かなくちゃ。つめたい雨が僕の目の中に降る。君の傘以外は何も見えなくなる。それはい事だろ？

矢野と豊饒の世代

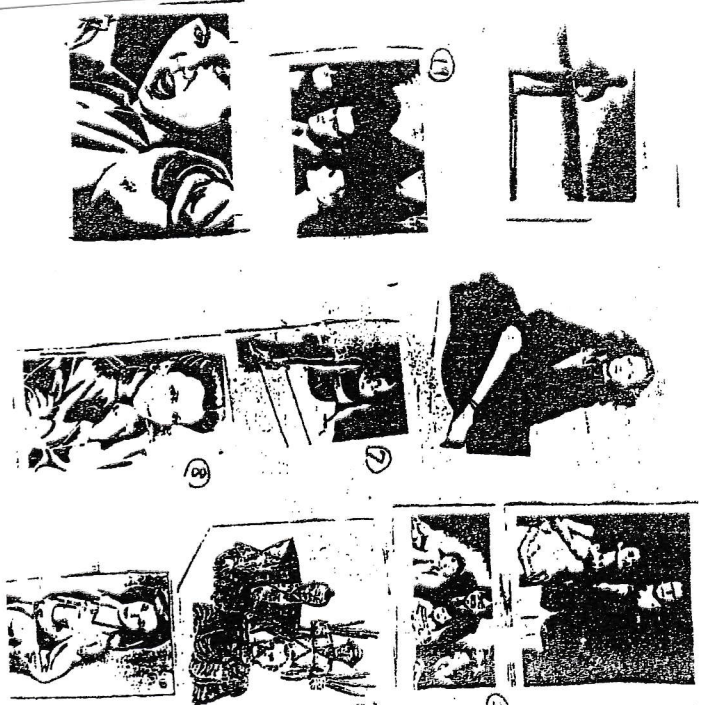
——井上陽水「華がない」に寄せて

副田 義也

女性の姿がここにはあるように思う。
各時代のラブソングを比べると、時代と共に恋愛シーンにおける男女の形の変化がわかった。そこには社会に積極的に進出するようになった女性の心理変化が大きく影響しているのだと思う。この原理はどの時代にも共通して言えることではないだろうか。

ているのだろう。「美」とされる「恋愛」など無くなってしまい、定義づけするよりも個々が楽しめる「恋愛」が望まれるようになったように思う。

ラブソングに両思いで幸せいっぱいなものだけでなく、失恋、片思いの気持ちを歌った曲が多いのは、「叶わないかもしれないけれど、やはり好き」という想いこそが最も人々の共感を得られるものだからではないだろうか。幸せの「真ん中」にいる人は歌に心の穴を埋めてもらう必要も無いが、そこより少し離れた人は涙山いいるし、歌による「癒し」を求めているのだと思う。この原理はどの時代にも共通して言えることではないだろうか。



恋の時代
ラブソングの時代